

吉良智子著(平凡社、2023年)

女性画家たちと戦争

マグダレナ・コウオジェイ*

本書の青いハードカバーには、《大東亜戦皇国婦女皆働之図》の原色版が掲載された帯が巻かれている。シンプルで控えめな表紙とのコントラストのためか、働く女性の姿がさらに生き生きと見えているように見える。女流美術家奉公隊によるこの合作は、1944年に制作され、同年の陸軍美術展に三部作として展示された。日本画の一点は行方不明だが、西洋画の二点は、各およそ3×2メートルで、2022年8月にはNHK教育テレビジョンの特集『女たちの戦争画』の中でも取り上げられた巨大な記録画である。この作品は、総力戦下の社会における女性の立場の揺らぎと、戦争が画家たちにもたらした大活躍の機会を語っている。

著者の吉良智子氏は、長年この作品を研究対象にしてきた。博士論文(千葉大学、2010年)に始まり、専門家向けに書籍化した『戦争と女性画家:もうひとつの近代「美術」』(ブリュッケ、2013年)、そして一般読者に向けて書かれた『女性画家たちの戦争』(平凡社、2015年)を通して、その研究成果を辿ることができる。本書は、この二冊の本が絶版になったことをきっかけに、内容を再構成し画家とのインタビュー及び新たに発見された資料などを加えて、2023年に出版された。

章立ては、明治末から戦後まで、年代順に画壇の歴史と女性画家たちの状況を追っている。第一章では、近代の女子美術教育について述べられている。第二章では、大正昭和初期の画壇における官展とその他の美術団体の機能、朱葉会や女紳会など女性画家のみのグループの登場に焦点を当てている。第三章では、女性画家たちが描いた画題と、彼女たちの作品に対する評論家たちの「女性らしさ」の要求を分析している。第四章では、日中戦争から太平洋戦争に向けて画壇が戦争色に染まる中で、女性画家に託された役割と女流美術家奉公隊の結成について明らかにしている。第五章

では、《大東亜戦皇国婦女皆働之図》の様式や、42種類の労働を描いた画題とその時代背景を説明している。第六章では、長谷川春子、桂ゆき、三岸節子という三人の画家に焦点を当て、それぞれのキャリアと女流美術家奉公隊への参加について記述している。第七章では、女性画家の戦後の活躍と戦争画の扱いについて考察している。最後に、元奉公隊の四人の画家とのインタビューの書き起こし、隊員名簿、関連年表が貴重な資料として付録されている。

女子大で教えている筆者は、ゼミの学生と一緒に『女性画家たちの戦争』を読んで、ディスカッションしたことがある。その際に、吉良氏をゲストスピーカーとして迎えて、学生たちとの質疑応答を企画した。対話の中で、吉良氏が1990年代末に学部生として研究テーマを探していた時に、アーティスト嶋田美子を通して初めて《大東亜戦皇国婦女皆働之図》の存在を知り、のちにそれが自分の生涯に亘る研究テーマになったと伺った。

実は、1990年代は、歴史認識を巡る重要な時期であった。戦後、東京裁判を経て冷戦下のアメリカの影響によって、一般の人々の中で、我々は政府に騙されて戦争に参加せざるを得なかった、空襲と被爆を生き抜いた被害者だという意識が広まった。時は経ち、1989年に昭和天皇が「崩御」し、1991年に金学順が公の場所で元「慰安婦」だと打ち明けた。これを契機に加害と戦争責任について意識が高まり、1993年には河野談話が、1995年には村山談話が発表された。そして同じ頃、嶋田美子は、「慰安婦」や戦時中の日本人女性についてのリサーチを進め、〈Past Imperfect Series〉〈Comfort Women, Women of Conformity〉等といった自身の作品のテーマとして採用した。

さらに、同時代から、従来の日本近代美術史からほとんど除外されてきたもの——特に戦争画・

* 東洋英和女学院大学国際社会学部

帝国／植民地・女性／ジェンダー——についての研究が増え始めた。例えば、若桑みどり著『戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』（筑摩書房、1995年）、丹尾安典・河田明久共著『イメージのなかの戦争』（岩波書店、1996年）、金恵信著『韓国近代美術研究——植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』（ブリュッケ、2005年）、北原恵編著『アジアの女性身体はいかに描かれたか』（青弓社、2013年）などが挙げられる。吉良氏の本書も、その流れを汲み生まれ育ったものである。最近出版された小田原のどかと山本浩貴共編『^{近代日本}この国の芸術——〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』（月曜社、2023年）の中にも、吉良氏による論文が掲載され、美術史家とアーティストが「日本美術史」に内在する問題点に真剣に向かい合っている姿が見られる。

本書を出発点にして、いくつか考えさせられた点について述べたい。

本書には、関連年表が掲載されている。ここには、女流美術家奉公隊の関係者についてのみが記されているが、その他の女性画家の個展や、女流美術展覧会と日本女子美術院の展覧会などを書き加えることができれば、当時の女性画家の活動をさらに網羅的に把握することができると考える。ただし、植民地や海外で活躍していた日本女性画家を含むかといった地理的な範囲についての考察が必要である。また、日本国内で活躍していた植民地出身や外国人の女性画家をどう扱うか、エスニシティ／民族の多様性を意識した研究も求められる。このようなジェンダーとエスニシティ／民族の交差と場所への意識は、吉良氏宛ての課題というより、今後の美術史研究全体に対する希望である。

本書の年表には、「女性美術家に関する主な出来事、関連展覧会」と「美術界に関する主な出来事」が二列に分かれて記載されている。この分け

方は、見やすく便利であるという利点だけでなく、「女性の美術史」と「美術史」が平行している現状を表しているようにも読みとれる。これからはこの二つの美術史をどのように統合するのか、残された課題である。本書は、女性画家にスポットライトを当てながら画壇全体の状況も踏まえて論を進めていることで、こうした統合の可能性を暗示しているとも言える。

本書は、美術史から見逃されてきた女性画家の活動を掘り起こし、歴史的な文脈の中で分析した点について高く評価できる。同時に、そうした当時の美術史をひも解くことで、戦争自体の理解を深めることにも貢献している。戦争を経験した世代が高齢化し亡くなりつつある現在、戦争の記憶をどのように伝えていくかが重要な課題となっている。Eika Tai氏が指摘した通り、1990年代には、一般の日本人が被害者意識と加害者意識の狭間にあったが、結局1990年代後半以降、歴史修正主義者が影響力を拡大させたことと学校教育における不十分な歴史教育の結果、加害者意識が国民の中に広まらなかった。女性画家たちは、当時を生きた「一般の人々」である。彼女たちの活動を知ること、すなわち「一般の人々」が経験した戦争を知ることであり、そこに含まれる差別、葛藤、選択肢、被害者と加害者でさまよった立場などについて考えさせられることにつながる。本書との出会いが、このような問題点についてさらに深く複雑に考えるきっかけになることを祈っている。

参考文献

- 東京都写真美術館・朝日新聞社編集、1996、『ジェンダー——記憶の淵から』東京都写真美術。
- Ching, Leo, 2019, *Anti-Japan: The Politics of Sentiment in Postcolonial East Asia*. Durham: Duke University Press.
- Tai, Eika, 2020, *Comfort Women Activism: Critical Voices from the Perpetrator State*. Hong Kong: Hong Kong University Press.